

「きらい」と「いや」

清水 由美

はじめに

つぎのような会話は日本語としてごく自然なものであろう。

(1) (へびは) きらいですか。

— 世界じゅうで、一番、いやです。(鈴木佐代子『立原正秋 風姿伝』)

「きらい」かと聞かれて「いや」だと答えてもいいわけで、この二つのナ形容詞(形容動詞)は確かに重なる部分をもっている。しかし(2)は非文である。4コマ漫画を見て描写文を作るという課題の中で、日本語学習者が書いてきたものである。

(2) *コボちゃんは、歯科医者をきらがっています。

「歯科医者(に行くこと)をいやがっている」とすべきところであろう。同じように不快や嫌悪の感情を表すかに見えるこの二つの語は、どこで重なりどこで異なるのであろうか。比較的くわしくこの二つを対照させているものに飛田・浅田(1991)がある。以下に引用する(下線引用者)。

(3) 「いや」は「きらい」に似ているが、「きらい」が一般的な嫌悪感を表すのに対して、「いや」が表す不快感はその場かぎりのものであることが多く、主体や対象を限定しない。また「きらい」は自分以外の人についても言い切りで用いられる点が「いや」と異なる。(前掲:67)

ここで「きらい」について「一般的な嫌悪感」といっているのは、挙げられている例からすると「主体にとって恒常的」という意味であるらしく、その限りでは異論はないのだが、それにしてもたとえば「いやなヤツ」などという表現を説明するにはやや不足があるようだ。本稿では(3)の解説を実例に即して検証し、他の弁別的要素を補う作業を通して、この二語のふるまいの違いが何によるのかの説明を試みたい。

1. 人称制限

三上(1960:191f)は、「コワイ、痛い、キライダ」などを感情を表す形容詞としてまとめた上で次のように述べている。

- (4) 感じ手は話し手自身であるのが本来です。(略)だから、語順がどうなっても、感じ手が不明になることはまずありません。

アノヒト、ワタシ、キライ!

(cf. ワタシ、アノヒト、キライ!)

ほとんどの場合これは正しいと思われるが、(3)でも言われているように、「きれい」には三人称で用いられる次のような例も見られるのである。

- (5)a. あの人はうそが嫌いだった。(ジャイアント馬場監修「力道山」)

いまこれを「いや」で置き換えてみると許容度は落ちる。

- (5)b. ?あの人はうそがいやだった。

(cf. あの人はうそがいやだったのだ。)

- c. わたしはうそがいやだった。

意味が等価であるかどうかは今では問わないとして、一人称の(5)c.は十分文法的である。それに対してb.はそのままでは認めがたい。「~のだ」のような埋め込み文にしなければならない。つまり「きれい」は一人称以外を経験主体(感じ手)とすることができるのに対して、「いや」は平叙文においては一人称しかとらない。あるいはこのことが「きれい」にあって(2)のような派生を排除する要因の一つになっているのかもしれない。

2. 格関係と意味

2.1 二重主格構文

「きれい」と「いや」に係わる要素を同定する便宜のため、この二語が二重主格構文の述語になることを確認しておこう。(非文ではないが意味的に不完全なものに#を付す)

- (6)a. 立原さんは、言い訳がきれいなのか、…(「立原正秋」)
b. 立原さんが言い訳がきれいなのはむかしからだ。
c. #立原さんが ϕ きれいなコト
d. # ϕ 言い訳がきれいなコト

(6)a. を無題化するとb.が得られる。そして「立原さん」と「言い訳」の各一方を削除したc.やd.は明らかに何か省略された不完全な文という印象を与える。しかもc.の場合には「立原さん」が嫌われているのか嫌っているのかも判然としなくなる。したがって基本的に「きらい」は次の構文をとることがわかる。

(7) NP₁ が NP₂ が _____

「いや」の方はどうか。赤塚不二夫の漫画に添えた次のような文を街で見かけた。

(8)a. オソマツはいやざんす。(1991年10月住宅月間ポスター)

ポスターの趣旨からして「オソマツ」には次のような意味がかけてあるものと思われる。

(8) b. おそ松君がお粗末な住宅がいやなコト

このような解釈ができるということは、やはり「いや」も潜在的に「きらい」と同じく(7)のような二項述語文であることを示唆する。ただし「いや」に関しては次の例も容認されるようで、これについては後述する。(⇒ 2.3.1)

(8)c. ?おそ松君にお粗末な住宅がいやなコト

2.2 「きらい」におけるヲ格の許容

つぎの例のように、「きらい」はNP₂ をヲ格でマークすることがある。

(9) 決して、父を嫌いではなかったのに、どうにもならなかった。(立原幹「風のように光のように」)

森田(1989:545)はこのような形を誤用としているが、柴谷(1978:229ff)には、ヲ格が状態述語「好き」「嫌い」「ほしい」「～たい」や動詞の可能形などと共起する(9)のような例がかなりの数、紹介されている。同時にこのような例がすでに17世紀以前に見られることがコリャードの文献などに挙げられていることも指摘している。とすれば(9)のような形を一概に新しい現象とか、まして誤用と決めつける態度は、

「こと」の要求度もこれに支配されているらしい。つまり(14)のような形容動詞文において、階層の左の方の名詞句は「こと」が任意に使えるが、階層の右方の名詞句では使えないというのである。(例文と判定は角田前掲:58)

- (14) 固有・親族： 僕は花子（のこと）が嫌いです。
人間： 花子はその男（のこと）が嫌いです。
動物： *花子は犬のことが嫌いです。
花子は犬が嫌いです。
無生物： *花子は果物のことが嫌いです。
花子は果物が嫌いです。

厳密に言えば<動物>の場合も「あの犬のこと」とすると許容度はやや上がるのであって、単純に<動物>と<人間>という要素だけでは比較できないのであるが、<無生物>の階層までいくと、たとえ「あの果物のこと」としても許容できない。

さて、ここで(9)と(11)~(12)の現象を振り返って、そこに現れるNP₂をチェックしてみると、やはりこの階層に支配されているように思われる。例文を再掲し、比較してみよう。

- (15) わたしは父（のこと）が嫌いだ。
わたしは父（のこと）を嫌いだ。
(16) おれは若い女が嫌いだ。
?おれは若い女のことが嫌いだ。
?おれは若い女を嫌いだ。
*おれは若い女のことを嫌いだ。
(17) 先生は写真が嫌いだ。
*先生は写真のことが嫌いだ。
*先生は写真を嫌いだ。
*先生は写真のことを嫌いだ。

階層の<人間>に当たる(17)の「若い女」と(14)の「あの男」のところではやや判定にずれがあるが、これは「あの男」が特定の人物で階層の左寄り（固有名詞に近くなる）であるのに対し、「若い女」は不特定であることから階層の右寄りと考えれば説明がつく。そして「父>若い女>写真」というグラデーションをなして「こと」とヲ格の許容度が一致しているといえよう。

そして「いや」がヲ格を許容しないという事実は、「いや」が「こと」のつかない階層の名詞、すなわち階層の右方の語をNP₂にとる傾向があることを暗示するのかもしれない。逆に言えば、階層の左方の語をとった場合でもそれを階層の右寄り、すなわち抽象名詞のように解釈させるとも言えよう。

(18) 僕は花子がいやだ。

→花子の態度／花子と会うこと／花子を選ぶこと／…がいやだ。

そしてこの現象は 3.2 で述べるように「いや」がNP₂にコト的な名詞句を優先的に選ぶことにも通じると言えそうだ。

2.3 主語性と属性化

2.3.1 主語性

今度はNP₁に焦点を当ててみよう。さきに(8)c.で指摘したように「いや」の場合には、NP₁がニ格でマークされることがある。その文法性の判定については2.2のヲ格の場合よりもなお個人差が大きいようだが、それでも「きれい」における場合((20)b.)に比べると「いや」におけるニ格((19)b.)の許容度は確かに高い。

(19)a. (わたしは) 家の中から笑いが消えるのが嫌で、… (「風のように」)

b. ?わたしには家の中から笑いが消えるのが嫌だった。

(20)a. 立原さんは、結婚式とか披露宴などに出るのが嫌이었다。(「立原正秋」)

b. *立原さんには、結婚式とか披露宴などに出るのが嫌이었다。

(19)はさらに「に」を「にとって」に交替させると、より許容度が高まるように思われる。

(19)c. わたしにとっては家の中から笑いが消えるのが嫌だった。

この一連の格交替「ガ→ニ→ニトッテ」について、この順にNP₁の主語性が低くなるという考察がある(杉本1986:333)。ここでその妥当性を検証するゆとりはないが、(19)a.~c.を次の(21)a.~c.と対比すれば充分であろう。(例文杉本を一部改)

(21)a. *学生達がドイツ語の格変化が難しいコト

b. 学生達にドイツ語の格変化が難しいコト

c. 学生達にとってドイツ語の格変化が難しいコト

「難しい」の場合、「学生達」がはじめから格を取れていないことから「学生達」の主語性は低く(柴谷1985)、「難しい」のが「ドイツ語の格変化」であることは明らかである。それに対し、(19)の「いや」が「わたし」の感情なのか「笑いが消えること」の属性なのかの判定は簡単ではない。他方(20)においては「きれい」は「立原さん」の感情だというのが妥当だという気がする。このことをはっきりさせるために、属性化ということについて考えてみよう。

2.3.2 属性化

つぎの三組の文を比べられたい。

- (22) a. 学生達にはドイツ語の格変化は難しい。
b. 学生達にとってはドイツ語の格変化は難しい。
c. ドイツ語の格変化は難しい。
- (23) a. ?おそ松君にはドイツ語の格変化はいやだ。
b. おそ松君にとってはドイツ語の格変化はいやだ。
c. #ドイツ語の格変化はいやだ。
- (24) a. *おそ松君にはドイツ語の格変化はきれいだ。
b. *おそ松君にとってはドイツ語の格変化はきれいだ。
c. #ドイツ語の格変化はきれいだ。

(22)c. は何かが省略されているという感じはしない。すなわち「に」や「にとって」の名詞句は任意であって、「難しい」が「ドイツ語の格変化」の属性についての一般的な陳述になっている。これに対し「いや」や「きれい」が「ドイツ語の格変化」の属性について述べられたものとは考えられない。(23)(24)のc. は明らかに不完全な文であって、「おそ松君」の存在が必須なのである。このように述語によって格名詞句についての属性表現化を起こすものと起こさないものがあるという現象を、杉本(1986)は属性化と呼んでいる(:327)。

ここからわかることは、任意の「NP₁ニ/ニトツテ」を何ら問題なく認める(22)のような述語はNP₂の属性を表すが、「NP₁ニ/ニトツテ」の許容度が低い((23))か全く容認されない((24))ような述語は属性化を起こさないということである。しかし、「きれい」と「いや」にNP₁が必須であることは実はすでに2.1でわかっていたことであり、この点では「きれい」と「いや」に差は認められない。

ここで次の文をみてほしい。

- (22)d. 難しいドイツ語の格変化
- (23)d. いやなドイツ語の格変化
- (24)d. #きれいなドイツ語の格変化

連体構造になると「いや」と「きれい」の差が見えてくる。(24)d.には明らかな欠落が感じられるのに対し、(23)d.は必ずしもそうではない。しかし(22)d.と(23)d.の間にはやはり違いがあり、(22)の「難しい」は属性化で説明できても、(23)d.の「いや」を「ドイツ語の格変化」の属性と言い切るのはためられる。

そこで属性とは別にNP₁について「一般性」という概念を導入したい。

3. 意味関係

ここからは格関係をはなれ、述語であった「いや」と「きれい」の意味的側面に焦点を当てていく。

3.1 一般性と個別性

再び実例の観察にもどろう。(22)～(24)の各d.において観察したような、見かけ上NP₁に当たる名詞句を欠いた例である。

(25) 西の方にいやな色の雲がわいていた。(深田久弥「わが山山」)

いやな御時世になりましたな。(池波正太郎「鬼平犯科帳」)

やなおんなが声を揃えて御上りなさいというので…(「坊ちゃん」)

いやな目つきでこっちを見た。(「第三阿房列車」)

(cf. いやなドイツ語の格変化)

(26) 韓国で行われたアンケートで、嫌いな国は「日本」と出た。(朝日新聞)

ボク今まで嫌いな人に会ったことないの。会えばみんな好きになるのね。(淀川長治インタビュー)

「いや」には一般性があるのに対し、「きれい」は特定の個人(淀川氏)あるいは集団(韓国国民)の嗜好を反映している。これは(3)で「「いや」が…主体…を限定しない」と言われていることに合致するものである。

3.2 コト対モノ

3.1で見たように「きれい」はその具体的な経験主体(NP₁)を必須とするだ

けでなく、次の例にあるように、その対象 (NP₂) にも具体的なモノを好む語であるようだ。一方「いや」は漠然とコトを指すことができる。いちいち示さないが下の(27)と(28)の「いや」と「きらい」を入れ替えることはできない。

- (27) ワシ、なんかもうイヤになってきたなあ。(はるき悦巳『じゃりん子チエ』)
こういった状況が嫌だとか、そういう感情もなかった。(『風のように』)
いやなことはみーんな忘れて (美輪明宏『ミロール』)
おい、やなことというねえ。よせやい。(古今亭志ん生『火焰太鼓』)
しくじると、其時丈はやな心持だが… (『坊ちゃん』)
- (28) 汚い人間が、父は一番嫌いだ。 (『風のように』)
あんたなんか嫌いよ。口もききたくない。(望月峯太郎『バタアシ金魚』)

3.3 一回性と恒常性

さらにもう一つ言えそうなことは、(3)にもあった通り「いや」が一回かぎりの出来事に使えるのに対し、「きらい」は一定期間継続する感覚であるということである。このことはたとえば次のようなテストで検証される。

- (29) a. わたしは酒の臭いがきらいだ。
b. 宿酔いのときは酒の臭いほどいやな / *きらいなものはない。

また次例において「きらい」が使えるのはスーパーマンぐらいなものであろう。

- (30) おらあ死にたくねえ、…死ぬなあいやだ。(山本周五郎『ゆうれい貸屋』)

さらにはこの一回性ということは、その場かぎりの応答ということで感動詞的な用法につながっていくのである。

- (31) アレ、いやや、ここではそないなこと。(『志士の肖像』)
掃るぜ。 — 掃っちゃやだい！ (杉浦日向子『百日紅』)
絵を一枚描いてくれや。 — いやだ。(同上)

「きらい」にはこうした一回性はなく恒常的な嫌悪であるために、(2)にあったように外部から視覚的に認知可能な様子を表現するのに「～がる」の形はとることができないのであろう。

結語

本稿の考察をリストにまとめると次のようになる。

	<NP ₁ >			<NP ₂ >			一回性
	一人称	ニ格許容	一般性	ヲ格許容	属性化	コト的	
きれい	-	-	-	+-	-	-	-
いや	+	+-	+	-	+	+	+

このリストから言えそうなことは；①格交替におけるニ格とヲ格の許容の様子は「きれい」と「いや」において相補的であること、②ニ格を許容する「いや」の方が属性化が起きやすいこと、③属性化と一般性はほぼ連動しており、さらにそれはコト的表現指向へと通じていること、④人称の制限と一回性も連動しており、一回性の高い「いや」は一人称で用いられること、などである。

今回はこの二語に限って考察を進めたが、今後は「嫌う」「厭う」「嫌がる」「いやいや」「～のきれいがある」「～ぎらい」「(湿気を)嫌う」「いやらしい」「いやみ」等々の周辺の語句や、用法によって異なる反意語「好き」「いい」なども視野に収めることによってこの二語の輪郭をもっと明確にしていきたい。

参考文献

- 池上嘉彦 (1982) 「表現構造の比較 — <スル>的な言語と<ナル>的な言語」国廣哲弥編『日英語比較講座4 発想と表現』大修館書店
- 柴谷方良 (1978, 1990⁶) 『日本語の分析』大修館書店
(1985) 「主語プロトタイプ論」『日本語学』大修館書店
- 杉本 武 (1986, 1990²) 「格助詞 — 「が」「を」「に」と文法関係」『いわゆる日本語助詞の研究』にほんごの凡人社
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 時枝誠記 (1950, 1990¹⁵) 『日本文法 口語篇』岩波書店
- 飛田良文・浅田秀子 (1991) 『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
- 三上章 (1960, 1990¹⁹) 「彼女ヲ好キナ彼」「象は鼻が長い」くろしお出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店

(お茶大日本語文化専攻修士1年)